

性に疑義が生じた場合には生産を停止できる権限をもつ内部ハラール委員会が組織され、原料から製品まですべてコンピューターでハラール性が一元管理されていた。

注意点（クリティカルポイント・CP）：

トレーニングでは、各原料のハラール認証をする際、チェックしなければならないポイント（CP）の訓練がなされ、CPを見つける能力の重要性が強調された。例えば、植物油について、アメリカでは動物油が10%入ったものも植物油ということ、ヨーロッパでは、塩をゼラチンでコートすることがあることなどである。

発酵製品について：

発酵によってさまざまな物質が生産されているが、発酵製品については菌の由来と培地組成が重要であることが強調された。

化粧品、医薬品について：

今後は、食品のハラール認証ばかりでなく、化粧品と医薬品



トレーニング風景

のハラール認証が重要な課題となるだろう。それに伴い、ハラール認証基準の明確化が重要になっている。

研究所試験での試験・分析キットの採用：

LPPOMの新たな基準として、分析キットを採用している。このキットは、手軽に判定できるもので（ロシア製とのコメントがあった）、豚由来など、DNAの判定が簡便に出来るそうだ。研究所での試験は、必要に応じて行うとし、絶対必要条件ではない。

以上のように、トレーニングは多様な課題にわたって、長時間、極めて密度高く行われた。ハラール認証の世界的広がりを背景に、認証基準統一にかけるインドネシアの強い意志が感じられる7日間だった。日本のハラール製品製造企業にとってもこの動向を注視しておく必要があるだろう。

ハラール保証システムの国際研修会参加報告

イスラーム研究所シャリーア専門委員会委嘱研究員

木村 遼

6月22日（水）から同26日（日）まで、5日間に亘り、インドネシアのジャカルタで開催された、インドネシアLPPOMMUI（イスラーム学者評議会付属、食品薬品化粧品検査所）が主催する、海外ハラール認証団体向けの研修会に、参加したので報告する。当研修会は、6月に入ってからの手配であったため、小生の参加は、当初2名での参加予定であった「ハラール認証団体のための国際研修会（6月18日から同22日）」からの転向で、1人での参加となった。

今回の研修会には、インドネシアを含めた16ヶ国から60名が参加した。参加者は、認証団体、並びに食品、薬品の専門家と認証を受ける企業およびINDHEX2011（インドネシアハラール展示会）協賛企業の担当者たちで、研修の主な内容は次の通りである。

研修内容（6月23日）

ハラール認証の要件：

- 講演 1 ハラール認証のポリシーと手順について
- 講演 2 ハラール認証の基準について

原材料の知識と重要なポイントについて：

- 講演 1 動物由来の原材料
- 講演 2 微生物由来の原材料

研修内容（6月24日）

ハラール保証システムのドキュメンテーションと実践について：
ハラール保証システムの実践に於ける経験談：

当研修会は、インドネシア最大のハラール認証団体であるLPPOMMUIの「ハラール認証のポリシーと手順について理解し、実際の認証に際して、これを適用する」ことを目的とするが、企業側から見れば、「ハラール認証を受けた当該企業が、如何にすれば

継続して当該認証を受け続けられるか」を、LPPOMMUIの仕組みとして習得するものであるり、LPPOMMUIの中国（上海）オフィス代表も参加した。

ハラール認証手順の流れ

ハラール認証を受けるには、生産者とLPPOMMUIの両者が、「ハラール保証システム（HAS）」に適応するまで、協力しながら後述の15ステップの手順の流れに従いながら実施する。「監査会議」の評価が「C」なら不合格となり、登録書類やHASマニュアルの見直しが行われて、再度、同様の流れに従い監査を受ける。同評価が「AまたはB」ならば、監査結果は合格となり、「ファトワー会議」に移され協議され、その判定結果により「ハラール証明書」が発行される運びとなる。

以下に、その流れを示す。（括弧内は、その提供者で、生産者または、LPPOMMUI。）

- (1) ハラール認証手順（生産者）
- (2) ハラール保証システム（HAS）プログラムの計画（生産者）
- (3) HASの実施（生産者）
- (4) HASの要件を満すか？→Noならば（2）へ戻る（生産者）
- (5) ハラール認証プロセスの登録（生産者）
- (6) 申請書類とHASマニュアルの完成、並びにそれらの提出（生産者）
- (7) 事前監査とHASマニュアルアセスメント
- (8) 監査可能か否か？→Noならば（6）へ戻る
- (9) 現場監査の実施
- (10) 監査会議による評価・査定
- (11) 要件を満すか？→Noならば「監査メモ」添付で（6）へ戻る
- (12) HAS評価が「AまたはB」か？→Noならば（6）へ戻る
- (13) MUIによるファトワー会議で協議、判定
- (14) 要件を満すか？→Noならば（6）へ戻る

(15) ハラル証明書授与

インドネシア・ハラル展示会

当研修会は、メイン・イベントであるINDHEX2011（インドネシア・ハラル展示会）の開催に合わせて行なわれた。INDHEX2011が掲げる主題は、「HALAL is My Life」であり、会場のポスター、カタログ、横断幕、開会式の壇上等の何処にでも刷り込まれていた。

この開会式で目立ったのは、「世界ハラル評議会」宣言であった。同宣言と同時に、ルクマヌル・ハキム氏が、評議会員を演壇上に招待し整列させた。アラブ人が多いのが印象的であった。展示会には、86の業者や企業が出展していたが、その中で、ハラル認証団体からの出展は、LPPOMMUIと西オーストラリア・ハラル・オーソリティの2団体のみであった。LPPOMMUIは、各地区の支部が13のブースにそれぞれ陣取り、地域密着型のハラル産業を展示していた。その他、2研究所、3大学が出展していた。中小企業・組合省が主導するUKM組合は、22のブースを確保し、中小業者に割り当てていた。出展品、販売物では、薬品、化粧品、生物化学、食品雑誌、FMラジオ局、ディナール貨幣等、広く網羅していたが、目立ったのは、飲食物が抜き目出しており、大手では、マクドナルド、コカコーラが出展し、インドフードとユニバーは、各々4ブースを確保していた。

初日は、金曜礼拝と昼食の合間に一回りしただけであったが、空のブースが多少あるも活気に満ちていた。2日目は、荷物があっても人がいないブースが目立ち、活気があるのは、コンテストやエンターテイメントがあるコーナーだけであった。



ハラル展示ブース

第3回タフスィール公開研究会から 一預言者物語

イスラーム研究所シャリーア専門委員会委員 遠藤利夫

7月23日文京キャンパスで、今年度第3回目のタフスィール研究会を行った。今回は、第7章 高壁章（57節～87節）を解説した。その中で何人かの預言者についての話が出てきたので、イスラームの預言者を知る上で役立つものと考えて、発表内容から一部を抜き出してお知らせしたい。

1. 預言者ヌーフ（ノア）の物語：（59節～64節）

預言者は、神の唯一性と来世での懲罰（地獄）に対する警告を人々に伝える役割を負わされてアッラーから送られた者である。「先にわれはヌーフをその民に遣わした。かれは言った、『わたしの人びとよ、アッラーに仕えなさい。かれの外に神はないのである。本当にわたしは、偉大な日の懲罰をあなたがたのために恐れる。』（59節）預言者（ナビー）たちの物語は、本章（高壁章）の最初に述べたアダム（7章高壁章19節）に始まり、ヌーフは第二の人類の祖である。また、ヌーフはアッラーが地上の住人に送った最初の使徒（ラスール）である。

ヌーフ物語の歴史的意義：ヌーフは多神教徒へ遣わされた最初の使徒である。その昔、人々が偶像を崇拜し始めた経緯は、信仰深く敬虔な人物たちが死んで、人々は彼らのために礼拝所を建てた。人々は、敬虔だった人の状況、信仰を追求するために彼らに似せた肖像を描いた。それから長い年月がたち、肖像画を偶像にした。また、さらに長い年月が流れ、人々は偶像を崇拜した。これら敬虔な人々の名前は、ウッド、スワーウ、ヤグース、ヤウーク、ナスル（後にクライシュ族に崇拜される偶像たち）と呼ばれていた。この重大

な過ちを正すためにアッラーは使徒ヌーフを遣わした。それでヌーフは人々に、並ぶべきものなきアッラーへの信仰を命じた。ヌーフはクルアーンの中に43回登場する。高壁章、フード章、信者たち章、詩人たち章、月章、ヌーフ章に分かれて言及されている。物語の内容は、ヌーフが人々に唯一で並ぶべきものなきアッラーへの信仰を命じ、偶像崇拜を放棄させることであった。しかし、人々は頑固に反抗しヌーフに危害を加えようとした。民の中の愚かな指導者たちは、「自分たちの信仰は捨てない。あなたが警告する罰を見せてくれ。」と言ったので、アッラーの懲罰が下された。

ヌーフが人々に対する信仰の呼びかけをあきらめたのは伝道が始めてから950年後であった。アッラーはヌーフに、洪水から逃れるために船を作るよう命じた。人々は船作りをするヌーフのそばをあざけりながら通りすぎるのであった。アッラーはヌーフに彼の妻を除き家族を連れて行くよう命じた。また、信頼できる人々を連れて出た。それは6人の男とその妻だといわれ、一説では、40人の男とその妻たちといわれている。また、つがいの家畜、鳥、野生の動物を連れていった。

それから、すべての場所に大量の水が流れ洪水となったので、人々や動物など全てが滅亡した。方舟に乗らず、離れた場所にいたヌーフの息子は言った。「わたしは山に避難しよう。それは洪水から私を救うであろう。」（11章フード章43節）そして、方舟は南トルコのアルメニア山中、バクル地方にあるジューディー山（学者の研究によると、今日のイラクとイランにまたがるアララト台地であったといわれている。）に到着した。「御言葉があった。『大地よ、水を飲み込め。天よ、（雨を）降らすことを止めなさい。』水は引いて、事態は治まり、（方舟は）ジューディー山上に乗り上げた。ま

た仰せられた。『不義を行う民を追い払え。』（11章フード章44節）洪水の範囲について、学者たちに二つの見解がある。一つは、地上の全てが洪水となった。もう一つは、ヌーフと人々が住んでいた地域とする。それは中東とその周囲である。

試練は不正を行う者たちのみに限定されるものではなく、子供や罪のない者、動物や鳥なども含まれることは知られている。「また試みの災厄に対して、あなたがたの身を守れ。それはあなたがたの中不義を行う者（だけ）に下るものではない。」（8章戦利品章25節）

ヌーフは二つの祈りをした。一つは信仰者のため、二つ目は不信仰者のためである。

信仰者に対し：「主よ、わたしとわたしの両親を御赦し下さい。また信者としてわたしの家に入る者、また（凡ての）信仰する男と信仰する女たちを御赦し下さい。」（71章ヌーフ章28節）また不信仰者に対し：「主よ、不信心な居住者を誰一人として地上に残さないで下さい。もしあなたがかれらを残されれば、かれらは必ずあなたに仕える者を迷わせ、また罪を犯す不信心な者の外、生まないでしょう。」（71章ヌーフ章26-27節）

ヌーフの息子は滅亡者の一人であった。息子は不義を行う者、不信仰者であった。一説によると、妻のこどもであったが、本当の息子ではなかった。ヌーフの妻は、夫は狂人であると言っていた。「アッラーは不信仰者のために実例を示される。ヌーフの妻、そしてルートの妻である。かれら二人は、2人の正しいわがしもべの許にいた。かの女たちは、かれら（夫）にたいして不誠実で、アッラーの御許で何ら得るところはなかった。そして『あなたがた2人は（外の）入る者と一緒に火獄に入れ。』と告げられた。」（66章禁止章10節）

2. 預言者フードの物語：（65節～72節）

預言者フードはアードの民に彼らの仲間から遣わされた預言者である。「またアードの民に、その同胞のフードを（遣わした）。」（65節）フードのいたアード族は存在した国家の中で最も古く、遺跡も残っている。彼らは預言者イブラーヒームよりも先に出現した。それで、彼らはヌーフの物語の後に続き言及された。「主はあなたがたにヌーフの民の後継ぎをさせ、」（69節）と述べられている通りである。人々はヌーフの一族が大洪水にあった事を知っていた。それでフードはアード族に、「あなたがたは主を畏れないのか。」（65節）と、かつて地上で起きた大きな出来事を指して恐れるように説いた。アード族は地上で悪をなし、人々を虐待していた。アード族はアラブであった。彼らはイエメンからハドラマウトの北に住み、オマーンまで広がっていた。彼らは、偶像を崇拜していた。アード族がフードを信じようとしなかったので、アッラーは3年間雨を全く降らさなかった。そこで彼らはマッカへ雨乞いのための使節をおくり、そこにある偶像に祈った。すると、アッラーは、白雲、赤雲、黒雲の三つの雲を出現させた。しばらくすると天から使節の団長カイルに呼びかける声があった。「おお、カイルよ、汝と汝の民のために一つの雲を選べ。」カイルは答えた。「私は黒雲を選びました。この雲は雨を最も沢山降らせるでしょう。」この黒雲はアードの地では、アル・ムギースと呼んでいたワーディーに出現した。アード族の人々は、この黒雲を見て喜んだ。人々は、これぞ我々に雨をもたらす雲だと叫んだ。ところが、その雲から出てきたのは惨害をもたらす風であった。暴風は7夜8日にわたって吹き荒れ、それで彼らは滅亡した。フードと彼と共にいた信仰者は難を逃れた。

「また、アードは唸り狂う風によって滅ぼされた。7夜8日にわたり、かれらに対し絶え間なく（嵐が）襲い、それで朽ちたナツメヤシの木のように、（凡ての）民がそこに倒れているのを、あなたは見たであろう。それであなたは、かれらの中、誰か残っている者を見るのか。」（69章真実章6-8節）

3. 預言者サーリフの物語：（73節～79節）

預言者サーリフは、サムードの人々に送られた。「（われは）また、サムードの民にその同胞サーリフを（遣わした）。」（73節）彼らはアラブの部族であり、イブラーヒーム以前の者たちである。サーリフの属するサムードはアードの後になる。居住地域はヒジュルと呼ばれる、ヒジャーズとシャームの間のアル・カラー・渓谷付近であった。現在、マダーイン・サーリハとして残っている。彼らはそこで岩を削って住んでいた。「あなたがたは平地に宮殿を設け、また（岩）山に家を彫りこんだ。」（74節）預言者サーリフが彼らにアッラーへの信仰を説くと弱い者はそれを受け入れたが高慢な者は、それを拒否し証明を求めた。「その民の中の高慢な長老たちは、力がないと思われていた信仰する者たちに言った。『あなたがたはサーリフが、主から遣わされたことを知っているのか。』かれらは（答えて）言った。『わたしたちは、かれが遣わされた者であることを本当に信じます。』高慢な者たちは言った。『わたしたちは、あなたがたが信じるものを認めない。』（75、76節）アッラーはその印（証明）として1頭の雌ラクダを送った。「今主から証があなたがたに下った。このアッラーの雌ラクダが、あなたがたへの印である。」（73節）サーリフは言った。「ここに1頭の雌ラクダがいます。それにも水飲み日があり、またあなたがたにも、（それぞれ）決められた水飲み日があります。」（26章155節）順番を守れば、それぞれが水をのむことができ、ラクダの乳を飲むことができ、乳が尽きることもない。しかし、彼らは信仰に対し高慢な態度をとり、主の命令を無視した。「そこでかれらは、かの雌ラクダの膝の腱を切って不具にし、（屠畜し）かれらの主の命令を傲慢無礼にも無視して、かれらは言った。『サーリフよ、もしあなたが（本当に）使徒であるならば、ふりかかってくると言っているものを、わたしたちにもたせ。』（77節）それでサーリフは言った。『3日の間あなたがたの家で（生を）楽しめ。』（11章65節）その後、大地を震わす懲罰が下された。「そこで大地震がかれらを襲い、翌朝かれらはその家の中に平伏していた。」（7章78節）アッラーはサーリフと彼に従って信じた者たちを懲罰から救い出した。彼らはパレスチナ方面に入った。そこは肥沃な地だった。

4. 預言者ルート（ロト）の物語：（80節～84節）

預言者ルートは、預言者イブラーヒーム（アブラハム）の兄弟の息子である。彼は、イラク南部の東、バビロンと呼ばれた地に生まれた。預言者イブラーヒームと共にパレスチナにヒジュラ（移住）する。それからルートはヨルダン東部のソドムに住んだ。その人々は淫らなこと（男色）をする者たちだった。「かれはその民に言った。『あなたがたは、あなたがた以前のどの世でも、誰も行わなかった淫らなことをするのか。あなたがたは、情欲のため女でなくて男に赴く。いやあなたがたは、途方もない人びとである。』（80、81節）それに対する答えは村からの追放だった。「かれの民は、只（互いに）こう言うだけであった。『かれらを、あなたがたの村から追い出せ。』（82節）そこでアッラーは、3人の天使を送り、彼らの村ごと破壊した。「われはそれ（町）を転覆し、その上にわれは幾重にも焼いた泥の石を雨と降らせた。」（11章82節）この時、アッラーはルートの妻を除いた彼の家族を助けた。「こうしてわれは、かれ（ルート）の妻を除き、かれとその家族を救った。」（83節）

5. シュアイブの物語：（85節～87節）

シュアイブは、マドヤンの民に遣わされた預言者である。「（われは）また、マドヤンの民に、その同胞のシュアイブを（遣わした）。」（85節）マドヤンはアラブ族でヨルダンの東にあるマーアンに住んでいた。彼らはイブラーヒームの息子マドヤンの子孫である。彼ら

はアッラーを信じないで天使を崇拜していた。マドヤンの民は寸法や量りを不正に操作していたので、シュアイブは彼らに、それを正すよう注意し、アッラーの懲罰がくることを警告した。しかし、彼らは道端に座り、通りすぎる者に、「シャイブは嘘つきで、あなた方の宗教に何の魅力もない。」と言いつらした。「あなたがたがもしシュアイブに従うならば、きっと失敗者になるでしょう。」(7章 90節) 彼らは、シュアイブの伝道をやめさせようと試みた。また、彼を軽蔑し危害を加えようとした。「かれらは言った、『シュアイブよ、

あなたの言うことをまるで理解出来ない。またわたしたちは、本当にあなたは頼りにならないと思う。あなたの同族(のこ)を考えなかったならば、わたしたちはきっとあなたを石撃ちにしたであろう。あなたはわたしたちの間では無力なのである。』(11章 91節) 彼らは、不信心に固執し、言論も素行も改めないで、アッラーはマドヤン族をサムード族のように地震で滅ぼした。「だがかれらはかれを嘘付き呼ばわりした。それで大地震がかれらを襲い、翌朝かれらは家の中に平伏していた。」(29章 37節)

シャリーア・コラム

法の間隙を埋めるものは信仰

法の適用において考える時に、合法であるが非難されることがあることに気づく。それは基本的に「法目をかいくぐった」行為であることが多い。法目をかいくぐるとはどういうことであろうか。法は人間の行為をすべてにおいて規定できるものではない、ということであろう。そこで、法が規定しえない事からを見つけて、倫理的に悪事と感じながらも合法として事を行うことになるのであろう。倫理的に悪事と思われるとは、未だその事象に対して法規定がないからである。事が起こってから、それに対する規定が定まるのであるから、常に法は後追いになってしまっていて、結局、法規定がないので合法となるが、倫理的に世間から非難されることになる。つまり、そこで必要なことは法の本質であり、それは倫理、道徳である。法規定が存在しないが、倫理的に赦されないとするが、法で定められていないので行ってしまふことになる。ゆえに、倫理、道徳の重要性が言われるようになるが、その倫理、道徳が廃れてしまえば、法目をかいくぐるとはより頻繁に行われることになる。

イスラーム法的に言えば、法の間隙を埋めていくものは信仰である。神によって常に監視されていると感じる信仰であり、いかなる行為も来世にて審判の対象となり、悪事に対しては厳罰に処せられるとの信仰である。また、イスラームではヒーラを使うことを厳しく禁じている。ヒーラとは不正を正当化する行為である。このようにイスラーム法は信仰を基本とした法であるということがいえる。

また現世では本人の発言が重視される。個人の発言は来世にて確実に審判されるからである。発言の責任は間違いなく取らされることになる。

姦通罪について、預言者のハディースで次のようなことが伝えられている。

マーズ・ビン・マールク・アスラミーがアッラーの使徒のもとへやって来てこういった。

「私は本当に私自身非道な行為をしました。私は姦通の罪を犯しましたので、あなたが私を浄めて下さることを望みます」

だが預言者は彼を追い返した。

そして、次の日に、彼は再び預言者のもとへ来て、「アッラーの使徒よ、私は本当に姦通の罪を犯しました」と言った。

だが、預言者は彼を二度目もまた追い返した。そして、預言者は彼の一族のところへ人を送り、「あなた達は、彼の精神に何か異常があることをご存知ですか？」と尋ねた。

だが彼らは「私達が見る限りでは、彼は私達の間で十分に知性があるとしか思われません」といった。

ところで、彼が三度目にまたやって来たときも、預言者は彼らの所に人を送り、彼について尋ねた。

すると彼らは、「何も彼に問題はなく、知性にも心配はない」と彼に知らせた。それから、彼が四度目にやって来たとき(はじめて)彼のために墓穴が掘られ、それで彼を石打ちの死刑にすることを預言者は命じた。それで、彼は石打ちの刑にされた。

そこに示されているのは、本人の自白の重要性と信憑性である。自白を受ける者は慎重にそれを精査すべきことを示している。その発言の責任のすべてを来世にて背負うことになるからである。

また、イスラーム刑法にて、やはり姦通の刑罰について、次のような事例が記されている。未婚の女性が妊娠した場合には、裁判にて、姦通に対して四人の承認が必要とされるが、その四人の証人がそろわない場合には、当該女性の自白だけが重要な証拠となりうる。しかし、女性が頑として姦通行為を否定した場合には、姦通罪を決定することはできない。その女性の妊娠状況は日増しに明らかになるにしても、姦通罪を決定することができないのである。ここでは、女性の妊娠は性交でなくとも妊娠することが起こりうるとの判断からであるが、あくまでも女性の主張を重視するのである。この場合に、女性の主張が虚偽であるか否かは、結局、来世における審判にまかせることになるのである。つまり、信仰の問題に移行することになる。

そこで、イスラーム法の場合には信仰が薄くなった場合には、イスラーム法を遵守する傾向が弱くなっていくということにもなる。そこで、いかに信仰を強く維持していく社会を築くかが問われていくことになる。日本社会では、それに相応するのは、倫理道徳の強化とすることであろうか。

日本では一般人による裁判員制度が始まっている。しかし、イスラーム法ではそのようなことは考えられない。それは裁判官が、イスラーム法における学識を修めた者が携わる職であるからだ。それは日本でも同じであろうが、裁判員制度では一般人の感性を大切にすることが求められているということである。イスラーム法においてはクルアーンと預言者の慣行(スンナ)に戻って考えるとする基本的姿勢があるので、イスラーム法学者であろうが、一般人であろうが、信仰の感性に違いがあるわけではない。また、イスラーム法学者は日本における法曹界というような隔離された世界に閉じこめることもない。イスラーム世界には、イスラーム法学者と一般信徒との関係は常に開いており、法学者は一般信徒に尋ねられれば回答する義務があり、一般信徒は疑義があれば、法学者に尋ねる義務が生じるのである。ゆえに、イスラーム世界には、いたるところに法学者が座って一般信徒の質問に答える「よろず相談所」が設けられているのである。それはイスラーム法の基本は導きのためであって、処罰するためのものではないことにあるからである。

クルアーンの啓示 (2)

イスラーム研究所所長 森 伸生

(前号からの続き)

5. 啓示の理由・背景

クルアーンの啓示にはそれが下りた時の原因背景があります。それを知ることはクルアーンで言っている意味を正しく知るために重要な役割を果たしています。

例えば「東も西も、アッラーのものであり、あなた方がどこに向いていてもアッラーの御前にある」(2章115節)

この節から、礼拝においてキブラ以外に向かうことが許されると解釈する者がいます。しかし、この解釈は完全な間違いです。と言うのは、キブラに向くことは正しい礼拝の条件となるからです。

そして、この節の意味は、この節が下りた原因背景によってよりはっきりとします。

この節は旅に出て礼拝方向のキブラが分からない者に関して、預言者に下りた節であり、旅人はキブラが分からなくなってしまい、色々考えた末に、一つの方向をキブラと定めて礼拝を行ないます。

その時、たとえキブラの方向でない方向に礼拝を行なったとしてもその礼拝は正しい礼拝となります。と言うことは、この節は全般的に下りたのではなく、キブラが分からなくなった人に特別に下りた節です。

このように、啓示が下りた原因背景を知ると言うことは、その啓示の本当の意味を知ることができます。

ここで、他の例をあげてみます。

「本当にサファーとマルワはイスラームの行の一つである。だから、聖殿に巡礼する者、または訪れる者は、この両丘を巡っても罪ではない」(2章158節)

この啓示に関して、一人の男がアーイシャに尋ねました。「アッラーは『この両丘を巡っても罪ではない』と言われていました。そこで、私はこの両丘を廻らなくても差し支えないと考えます」と。つまり、この啓示からは義務性がないと解釈できると言っているわけです。

アーイシャは即、それに答えて「あなたの言っていることは間違いです。なぜなら、あなたの言うとおりであるならば、アッラーはその両丘を巡らなくても罪はないと言ったでしょう」それから、彼女はその啓示が下りてきた原因背景を彼に語りました。

イスラーム以前のジャーヒリーヤ時代においても、やはり人々はサファーの丘と、マルワの丘を巡っていました。その時は、サファーの丘にはイサーフという偶像があり、またマルワの丘にはナーイラという偶像が置かれていました。ゆえに、彼等の行はこの二つの偶像を廻ることでありました。そこで、イスラームがやってきて、この二つの偶像は両丘から取り除かれましたが、預言者の教友の幾人かはこのサアイの行をジャーヒリーヤ時代への回帰につながるのではないかとの恐れと不安により、このサアイの行をやりたがりませんでした。そこへ、この啓示が下りました。

このように、アッラーは「この両丘を巡っても罪ではない」と啓示を下し、当時の人々を安心させた訳です。

何か事件や社会的問題があり、それが原因背景となり啓示が下りてくることがありました。

また、教友からの預言者への質問がそのまま啓示が下りてくる原因背景となる場合もありました。その例として、「預言者よ、ユダヤ人は私達を惑わそうと、新月について色々な問題をあびせてきます。その新月が満ち、満月になり、またかけてゆき、もとももどってゆくのは、どのような意味があるのでしょうか」と教友の一人が預言者に尋ねました。そこで、次の啓示が下りました。「かれらは新月について、あなたに問うであろう。言ってやるがいい。それは人々のためまた巡礼のための時の定めである」(2章189節)

これにより、新月に関する、古来幾多の迷信を廃して新月は暦のためだけにすぎず、また人間がそれによって熟考すべき一つのしるしであると言ったわけです。

これらの啓示が下りた原因背景は預言者、または教友からの正しい伝承によって知るほかはありません。

また、啓示から得られる戒めや教えはその下りた原因背景に限定されるのであるか、それとも一般的なものであるかと言う問いがありますが、これはその戒めや教えはその下りた原因背景人物を越えて全人類にかかるものであります。

今まで述べた原因背景と言うものがすべての啓示にあるとは言えません。と言うのは、クルアーンは事件とか、問いとかについてばかりで下りてくるのではなく、人間社会におけるアッラーの律法、義務、または信仰教義について基本的に下ってくるものだからです。

6. クルアーンの編纂

クルアーンは預言者の時代、また第一代カリフ・アブーバクル時代とそして第4代カリフ・ウスマーン時代に編纂されました。

預言者時代のクルアーンの編纂は記憶と文字の二通りの方法を同時に用いました。

(1) 記憶による心への編集

クルアーンは文盲である預言者に下りてきました。

文盲のアラブ世界に文盲の預言者が遣わされたのは必然的であったわけです。

クルアーンの中に62章2節に次のようにあります。

「かれこそは文盲の者たちの間に、彼等の中から使徒を遣わし、しるしを読み聞かせて、かれらを清め、啓典と英知を教えられた方である」

文盲であるため、暗記に頼らざるを得なかったということが言えます。

また預言者自身、そのクルアーンの暗記に対して大変努力をばらっていました。礼拝とともに、クルアーンを朗読し、夜明かしをすることも度々でした。

預言者の教友たちにしても同様にクルアーンの朗読に励みその暗記に最大なる努力をばらっていました。

教友の多くはクルアーンの暗唱で有名でした。預言者時代のクルアーン暗唱者の数は以下のことからその多さを推測することができます。

ヤマーマの戦いで戦死したクルアーン暗唱者は70名を越えると言われ、またマオーナの泉の戦い(ヒジュラ4年)で戦死したクルアーン暗唱者は70名を越えると言われています。これから考えても、かなり数のクルアーン暗唱者が居たものと思います。

ムハンマドが築いたイスラーム共同体において大きな特徴は聖典クルアーンが人々の心の中に確実に刻み込まれていたということです。その啓典を子孫に伝達するのに人々の心に刻みこむことに頼ってきたものであり、決して文字だけに頼ってきたものではないと言うことです。

(2) 文字による編纂

当時預言者には啓示の書き手が数人居ました。

預言者は啓示ある度にすべてを書き留めるように命じてきました。

これらの書き手で有名な教友は、ザイド・ビン・サービト、ウバイヤ・ビン・カアブ、ムアーズ・ビン・ジャバル、ムアーウィヤ・ビン・アブースフヤーン他4代カリフたちでした。

教友たちは動物の肩甲骨、やしの葉、平らな石、動物の皮などにこれらの啓示を書き留めていました。そして1章が完全に啓示されると、預言者は自ら監修の下で、書記たちはすべての書き留められたものを分類し、清書します。

ジブリールが啓示を伝える時、常に「ムハンマドよ、アッラーは

そなたにこの啓示は何章の何節の後に置くように命じています。」と語ったそうです。それによって、預言者は章や節の順序を知っていました。預言者は毎年ラマダーン月に天使ジブリールの面前でそれまでに啓示されたクルアーンの章句を朗しょうし、またムハンマドの生涯の晩年にはジブリールが彼にクルアーン的全章を二回朗しょうするように命じ、教友たちはこの公開の朗しょうに出席し、自分たちの個人的な写しと照らし合わせて誤りを訂正していたということです。

(3) アブーバクル時代のクルアーン編纂

預言者他界後、アブーバクルはカリフとなり、カリフ時代に様々な問題にぶつかりました。

その一つとして、背信者たちとの戦いがあります。

この背信者たちとの戦いで多くのクルアーン暗記者が戦死し、後の第二代カリフ・ウマルはクルアーンが忘れさらられるのではないかと大変心配しました。そこで、カリフ・アブーバクルへ、クルアーンを一冊の本に纏めることを申し出ました。

初め、アブーバクルはその申し出を聞き入れませんでした。と言うのは次のような不安からです。

- 1) クルアーンが一冊の本に編纂されたならば、その本に頼ってしまい、クルアーンを暗記しなくなるのではないか。
- 2) クルアーンを一冊の本に編纂することは預言者が命じたことでもなければ、彼が行なったことでもない。果たして、それが正しいことなのかどうか不安であった。だから、アブーバクルはウマルに「どうして、預言者が行なわなかったことを私が行なえましょうか」と言い返しました。

しかし、最後にはウマルからその事業の正当性、重要性の説得にあい、クルアーン編纂が、クルアーン保存に多に助けになることを確信するに至り、またこの事業は決してアッラーの意に反したことでないと確信し、クルアーン編纂を命じました。

アブーバクルはクルアーン編纂のために、ザイド・ビン・サービトを多くの教友の中から選び、その任を命じました。

なぜなら、ザイドは(1)当然クルアーン暗記者の一人であり、(2)また、預言者のための啓示の書記官の一人であり、(3)預言者の晩年における公開朗しょうを目のあたりにした一人であり、(4)それらに加えて、彼の性格、知性そしてアッラーへの敬しんの念の強さが彼を選んだ理由となりました。

アブーバクルは彼に、この事業を命じた時の彼の言葉があります。「山一つ動かすことがクルアーン編纂よりも私にとって、どんなにたやすいことであるかしれない」

このように教友たちにとって、クルアーン編纂は彼等の心にどんなに畏怖の念をいだかせたかわかりません。そしてそれは預言者が命じなかったことであり、彼等がそれを行なうことがどれほどに決断と勇気が必要であったかはかりしれません。

(4) クルアーン編纂にといった方法

- 1) 記憶されているもの
- 2) 預言者のもとで書かれた写とそれに伴う証人2人

ウマルは町中に「預言者からクルアーンの一部を得て持っている者はそれを持って来たれ、」とおふれを出し、ウマルとザイドはモスクの前に座り、集まったクルアーンの検査を行ないました。

まず、書かれたものが記憶されているものと同じであるか確かめ、次いでそれが預言者のもとで直接書かれたものであるかどうかを確かめました。

(5) アブーバクル本の特徴

- 1) 完全な証明を伴った編纂本である
- 2) クルアーンの中で取り消されていないことが確定したものしか記録されていない。
 というのは、しばしばアッラーは新しく下した啓示によって先に下した啓示を取り消すことがあった。
- 3) 当時のイスラーム共同体全体がそのクルアーン編纂事業に集結した。

4) 確実な伝達による7つの読み方がその中に含まれている。

(6) なぜ、クルアーンは預言者時代に一つの本に纏められなかったか。

- 1) なぜなら、そのクルアーンの下り方によります。
 クルアーンは一度に下りずに徐々に下りたからです。それゆえに、すべてが下りるまでは纏めることができなかった。
- 2) いくつかの啓示は後に他の啓示によって消されています。これらもすべての啓示が下りた後でなければクルアーン編纂は不可能でした。
- 3) 節や章の順序は下りてきた順番通りになってはいないので、やはりすべてが下りてきたのちでなければ、編纂は不可能です。
- 4) 最後の啓示が下りた時から預言者が亡くなるまでの時間が短すぎます。最後の啓示があってから9日後に預言者は他界します。
- 5) 誰一人として、クルアーンを一冊に纏めようと主張する者も居なかったというわけです。クルアーン暗記者もクルアーン暗唱者も多くて、クルアーンがなくなるなどといった不安を抱くことは全くなかったわけです。

(7) ウスマーン時代のクルアーン編纂

1) ウスマーン時代におけるクルアーン編纂の理由

イスラームの拡張とともに、各地方にてクルアーンの読み方の違いが出てきたからです。

シリア地方の人々はウバイヤ・ビン・カアブの読み方を踏襲しました。

クーファ地方の人々はアブドラー・ビン・マスウードの読み方に、他の地方の人々はイブン・ムーサー・アシュアリーアの読み方を踏襲しました。

これらの読み方の違いによってムスリムたちの間に論争が生じました。

このことを知ったウスマーンは教友たちを集めて、アブーバクル時代に編纂したクルアーンを書き写し、各地方に読み手と一緒に送ることに決め、その任にあたった教友たちはザイド・ビン・サービト、アブドラー・ビン・ズバイル、サイード・ビン・アルアース、アブドッラハマン・ビン・ヒシャームの4人でした。

この重大な仕事はヒジュラ24年でした。その時、ウスマーンは4人に対して「もし、あなた方の間で、読み方が違った場合には、クライシュの言葉で書くように」と忠告しました。

ウスマーンはウマルの娘であるハフサからアブーバクル編纂本を借り受けて、書き写しを始めました。

その写本は4冊作られ、マディーナ、クーファ、バスラ、シリア地方へ送られました。または、7冊作り、他にマッカ、イエメン、バハレーンへ送られたとも言われています。前者の意見が多くの学者の支持を得ているようです。いずれにしろ、その編纂本をウスマーン本と呼ぶようになりました。

そのウスマーン本以外のクルアーン編纂本はすべて焼くように命じました。

(8) アブーバクル本とウスマーン本の違い

- 1) その編纂理由の違い
- 2) アブーバクル本は章の並びが整っていませんでした。ウスマーン本になって預言者が読んだ通りの章の順序に編纂されました。
 現在、クルアーン暗記者の数は世界で数十万人に達し、数百万部におよぶクルアーンが地球上のあらゆる地域に配られています。このクルアーン暗記者の記憶と現在使用されているクルアーン原典の間には何一つ相違がないという事実は大変注目に値するでしょう。

原語のままの形をとどめている原典、預言者自らによる聖典編集、暗唱と写本双方による二重の照合、権威ある学者の研究により継続的に試みられたクルアーン原典の保存、あらゆる時代を通じて多くの人々によりなされた保存活動、原典にいかなる異文も存在しないこと、これらの点はクルアーンの顕著な特徴の一部をなしています。

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究所
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419 FAX：03-3947-9416
ホームページURL: http://www.cnc.takushoku-u.ac.jp

拓殖大学 イスラーム研究所 ニュースレター

平成23年10月20日発行 第32号
発行人 拓殖大学イスラーム研究所
編集人 イスラーム研究所主任研究員
柏原 良英

正統四代カリフの時代－アブーバクル（10）

（前回からの続き）

「アブーバクルの布教と奴隷解放」

アブーバクルは自分がイスラームに帰依して、次に預言者の家を訪れたときには、すでに一人ではなかった。クライシュ族の5人の指導者と一緒であった。アブーバクルは彼らにイスラームを説き、5人ともイスラームの教えに心服し、彼らは預言者のもとへ忠誠の誓いを行ないに来た。

ウスマーン・ブン・アッファーン、アブドッラハマーン・ブン・アウフ、アッズバイル・ブン・アルアッワーム、サード・ブン・アブーワッカース、タルハ・ブン・ウバイドッラー、以上の五人である。彼らは後々イスラーム共同体のまとめ役として活躍し、後に第二代カリフ・ウマルから次期カリフ選考を任される人達であり、ウスマーンは第三代カリフとなる人物である。そして、預言者から天国の朗報を告げられた人達である。これらの有力者が一度にイスラームに入ったのである。これこそアブーバクルの人徳によるものであった。

このように、アブーバクルはイスラームに帰依したのち、クライシュ族における自分の地位と名誉をイスラーム布教のために大いに活用した。彼は信用できる人物にイスラームを説き、イスラームの真実と教義を説明して、彼らにアッラーの使徒ムハンマドに従うように望んだ。彼の布教によりイスラームになった人々には、イスラーム布教の助けとなる人物が多かった。彼の手によって初期の頃イスラームに帰依した人々には先にあげた5人の他にも次のような人達がいいた。ウスマーン・ブン・マズウーン、アブーウバイダ・ブン・アルジャッラーフ、アブーサラマ・ブン・アブドルアサド、アルアルカム・ブン・アブーアルカムなどである。彼らは、預言者と共に激戦をくり抜けていく若者達である。ウスマーンはバドルの戦いで殉死してしまう。アブーウバイダは預言者が共同体の正直者と名付けた人物である。アブーサラマはウフドの戦いで負傷してそれがもとで殉死する。アルアルカムはイスラーム布教初期にハラーム境内の近くにある彼の家を布教の場として提供した。それらの若者の入信により、イスラーム教徒達の勢力が増大し、イスラーム布教の基盤が一層強くなった。

アブーバクルは実力ある彼の友人ばかりを相手に布教するに止まらず、弱い立場の人々にもイスラームを語り援助の手を差し伸べていた。彼は全財産をイスラーム布教のために惜しみなく差し出した。かつて彼には4万ディルハムもの大金があったが、そのすべてをアッラーの使徒のため、アッラーの道のために費やした。当時、1ディルハムは銀2・975グラムであった。預言者はそれを称賛して次のように言った。

「アブーバクルの財産ほどに私に役に立った財産は他にはない。」

アブーバクルは、イスラーム教徒になったために虐待されている奴隷達を解放するために財産を投げ出した。彼は七人の奴隷を元の主人から買い取り解放した。彼らはアーミル・ビン・フハイラ、ウンム・ウバイス、ジンニラ、アンナフディーヤ、アンナフディーヤの娘、ラバニー・ムアンマルの女奴隷、そして、ビラール・ブン・ラッバーフである。アーミルはアブーバクルの召使となり、聖遷のとき預言者とアブーバクルの手助けをすることになる。ビラールは後に預言者のムアッズィン（礼拝呼び掛け人）となった人物である。

ビラール解放の話は如何なる逆境にも絶えぬくビラールの強い信仰と共に、アブーバクルの奴隷解放にかけた情熱がよく現われている話として後世に語り継がれている。その話とは・・・ある日、ビラールはマッカの谷間に連れ出され、炎天下で仰向けにされ、腹の上に大石を置かれ、投げ出されていた。この間、ビラールは「ア

ハド、アハド（唯一なり）」と繰り返すだけであった。このような虐めにあうのも、彼がただただイスラーム教徒になったが故である。その場を通り掛かったアブーバクルは、すぐさまビラールを彼の主人から買い取り、彼を解放した。その時、アブーバクルはビラールの主人の言いなりに5ウキーヤを払った。当時、1ウキーヤは金約214グラムであった。ビラールの元の主人とその仲間達は勝ち誇ったようにアブーバクルに言った。

「もし、お前が1ウキーヤでしか買わないと言ったならば、あれを1ウキーヤでお前に売ったものにお前はこんな奴隷に5ウキーヤも払うとはな。」

だが、アブーバクルはビラールの腹の上の大石を退けながら毅然と言い返した。

「もしお前達が100ウキーヤ以外では売らないと言ったとしても、それでも私はあの者を買取ったに違いない。」・・・

（次号に続く）

研究会報告

【平成23年度第1回講演会開催】

今年度第1回目の講演会「イスラームと食文化」が、6月11日六本木のイラン料理レストラン「アラジン」で開催された。講師は有見次郎イスラーム研究所客員教授で、約70人の参加者にイスラーム食文化についてのレクチャーが行われた後、イスラーム料理を実際に食して体験した。参加者は食事をしながらイスラーム文化についての話題で盛り上がった。

【平成23年度第2、3回タフスィール公開研究会開催】

今年度第2回目のタフスィール（クルアーン解釈）公開研究会が、6月25日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は四戸潤弥同志社大学教授でクルアーン第7章高壁章33～56節を解説した。第3回目のタフスィール公開研究会は、7月23日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は遠藤利夫シャリーア専門委員会委員でクルアーン第7章高壁章57～58節を解説した。

محتويات العدد

- 1 . تدريب دولي لمفتشي الهيئة المانحة لشهادة الطعام الحلال. لجنة العلمية في معهد دراسات الشريعة: كوبايشي ايندو
- 2 . تقرير عن حضور تدريب دولي يختص بنظام ضمان الطعام الحلال باحث غير متفرغ في معهد دراسات الشريعة: كيمورا هاروكا
- 3 . مقالة نشرت في صحيفة أساهي عن الدورة الأولى لدراسات التفسير
- 4 . مقالة عن وحي القرآن (2)
- 5 . مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
- 6 . مقال : الخلفاء الراشدين (10)
- 7 . مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
- 8 . أخبار المعهد: الدورتان الثانية والثالثة لدراسات التفسير (سورة الأعراف)
- 9 . افتتاح المحاضرة الأولى للعلماء في العام الحالي 2011.